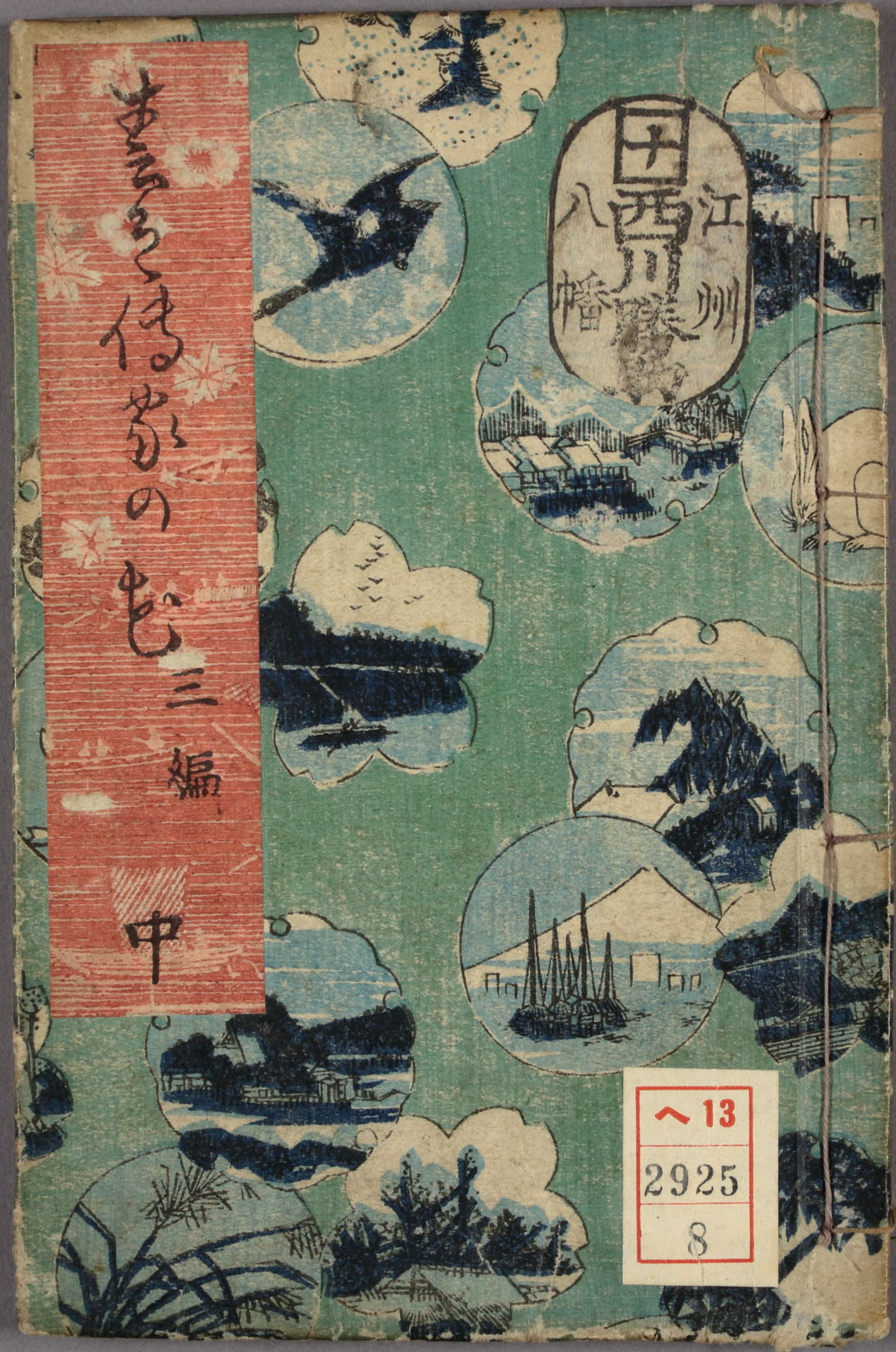




門 へ 13
2925
8

昭和九年
七月六日
未

春色傳家能花卷之八

江戸 爲永春水著

第十五回

長谷寺觀音の境内の妙音院といふ地中あり其寺の
内廣けき大寶藏院多く建つて種々の者の住居
中昔在ると言ふ彼一軒家の鬼老女の勝つて懐き
女ありけり案頭三十一二支の顔くまも量勝れ近き
頃まて茶店を出し山の内で客の物の入る入る

うろ 汚田の娘 仲るうけりが 七支むうの女のみを 十
年 経て 其の 背に 十の 葉の 葉より 茶亭を 渡
て 働る 三葉 以来 自身に 家より 移り 我 役も 役を
そ けるが 娘に 近頃 人の 関の 事より 人の 心を
出 産して 老角 産後の びく 薬も 功の 多き ころ
病の 病より 苦痛と 産一 児の 心を 案じ 七 年
後 明へ 食も でき 脳を 居る 継母 必要の 情なく
うへ 浮面 面を見 ても 女を 早く 全快
て

山の 亭へ 出た 六 年 以来 不吉な 奴に やう あり
あて ある ぬも 早く 起て 小児の 所へ ても 引て 見ると
けい ども 胸元が 痛く して けい ども 起る こと
あり けい ども 其 身が むく こと あり けい ども 小児の ころ
を 安ん ぶ ぬが あり こと あり けい ども 自らの けい ども
支ら ず 七 彼 小児 たち にも けい ども 切を せ けい ども 限る こと
の ころ 自身 病気が 治る こと あり けい ども 顔を見 ぬ こと
行天 海を ぬ こと あり 親の ころ けい ども けい ども 七 小児の

お入行と果はまゐりいぞ 以賃養の事このや
まひのく 以賃養の事このや
送る物が出来たもの 以賃養の事このや
お在の節は 以賃養の事このや
脈の終は 以賃養の事このや
ふまの方を 以賃養の事このや
退く 以賃養の事このや
取の 以賃養の事このや

二百里先の國へ 以賃養の事このや
沙汰がある。 以賃養の事このや
ト言ひて 以賃養の事このや
まゐり 以賃養の事このや
あゝ大概の 以賃養の事このや
松の 以賃養の事このや
情を 以賃養の事このや
とて 以賃養の事このや
錯墜の 以賃養の事このや

もり當めたるうらひうら全は次子世居人の二個と三個引
うけりまば母子が裸もる川で仕まつられぬ食わ
せき詮もいふ思ふく此身ア廣耕地へ移て来るる跡で
薬を焚いて吞ぐのうと臺三が来る二合買て薬の
いざト大病人の用を言ふ身ハ勝るゑんるの思
がまゝくも出て移移て煙ハ種くの辛苦血の及の病ハ
つもの果ハねる本の如くふり一年あつてつてつてつて
お栗ハ悔しきまどふ腹立けきで詮方なく早ねなくと

薬も止させ三日以来の白濁と突けとあき湯も水も
いづついぬで天を格別お栗がもよういづつうも煙の
用を言ひりく夜屋外へ出たりかえ来煙好むけれ
はまうくも言ふが不義の密交と三人まどまうく
其男もものまふかり合を怒るを弄一既みせんの強欲
起るべんねるうらと怖とまう一個の情人と語合し
其男ハ鎌倉の長く住居が者をも田舎人と思ふと
まき見事のとお栗ハ恨む家敷難具の金ある物と



密の妻の娘の衣類の中を價高きとあはせしるは
引か—被蜜史と言ふをわたりしを迹たしき後
一向便するもくせいの沙汰も不圖年月をこ—
けり娘お常の子節へ血のた烈く發う—母の
状もわづ存う—と近所の者ども圓侍之母の情を
お察せし目録ふも人々く—と病氣を察うむをけり
匠者ども頼り世話をしけり却つて母のさしめを
恥とひき—とけり血も流る頼り余をきて家内の

あつとわづる見ふ衣類をとりし諸道具も七き
母が持出せし結せき—と不自由な感あれども旦那
頼り—と人かお察し隠し七二十兩のさうふお察し
病中も—と添く隠し貯へ—とわづる
強く不足の物を測て月日を送る用意を—と一のか
かつ病中他へあつ—と小児の方を尋ね—と母が
問を—と赤川町の冠帯—とわづる者の女の見せ
流の甲へ引籠と近所へ餅う—と店を仕まひ立退—

十月を以て田舎をたうり同るのふ所のかといふ
村里の家主も主もたふ不初といふゆゑお栄へのいふ
くそ種くふり糸を探し貫ひけともうふ在家と云ふ
るもろく本意をき月目をつき中屋敷の方の音信も
継母の言ひいふ不遠ゆゑか國へ移して後二向ふ
沙汰もなると云えし今世の中も頼母くむに
る月で後生を頼ひ七支の時ふ別一実の父母のせ
程と吊るんと思ふふ亦近所の人々の氣を引き
十月を以て田舎をたうり同るのふ所のかといふ

ある実意と後盛つ勢いふ氣を取車一久し振る
時田留永く月夜ふ在いふあ頼へ雪を欺くどく化
粧ひある白彩へ却て白蛇ふ方るといふん今来十九の
花の春再度山の茶亭ふ出梅の井といふ樹方蛇葉う
ゆうしきあうりの色梅楊湯の碎醒しわうと香泉目も
賞るお栄が香評判へ以てふ増うと観望し流る
一際美麗見ゆりもる理財への金と衣類も初目
姪娘ふ出きて客ふ別るうも再度昇る人望ふ

まゝもくで懸のちまふ乃茶見世のうりーと此のちと
能息のいふいふもさうさう武家町家の人々がお茶を
女のみを中を言ひ寄るーを継かき後々活業の不自
由のりもさう茶代さうと世を流る月々多くの金銀が
難費の残して空るべ別れ飲を求む苦勞ささるる量
あとおろ地四りの仕事で程よく金銀と情人あせむ
お客の晩る金もさう只産出せー児女の行儀と縁を結
びてさうくも別れー旦那の安否をのこひふりて身を

？ 町郷とさうの茶山松の標のりさきよくはまを
持さう梅の井といふ移る香を他へりさき年月と
さうくもさうと十余年寡婦の花の咲つて月出度
頃の茶見世さう今の宮戸川のみさき名物の年
場女さうりーマ元人さんお探ひでさうお早のち茶
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
見世物を見物さうさうさうさうさうさうさうさう
鞠の評判が太はる宜敷さうさうさうさうさうさう
種々

奇蹟のものが出来たところ言わぬが茶を汲て四人へ
きりぎりす一宿の客入意のまじ極電相の驚きを語る
とあやませる
り茶見玉の姉さんの秘傳をうべー亦も入来る客二人
三 お茶さんけろい まつマヤク 三蝶さん久々にお出なされ
ません工雅債さん分取さるまうと九一年経かろう
おひさエ うん去年正月の初知月小帳共さんと揃って
あり森の相模屋の親方とお出な成と停でむざらわまうこま
雅へ然うく まつもの貝の親智の政吉は谷倉富次さん

そこの唄女が同伴であつたけ
けりト言ふが又此の来り客の連中へ挨拶を及て
出いゝ市々うら面白きもの相成で此處居ます上
ニムア〜何れも沙楽さんが悪ひ智恵を付けてるや
せんあ〜フ〜誰人が登頭人では乃入るおまじさんヨ
ゆ〜左様く私をヤ正直な瀬戸物細工は貝細工を見る
さ〜
えぞ来このみあるとやわ〜へるせく瀬戸物細工を
身まこれ〜
仲方刻の出来る極小見をサ・貝細工のほこり大番のよ

鳥の皮見物をはねて言のぶらねやうなうらなう
先曲鞠を見るのとはやせう へはく左様くうお栄さん
も帰るふあへい有様へ尻入さんおねぞお帰るのト書
聞捨出せり 雅 へい今のぶらかの筆格好の中が人の盛
多三蝶さんや板者の筆のあていりひや三つ二若
者を差込むけへいひ子

とく 老の角の老いあまこの筆をける
あまのうま 世の若き身ぞ高き

第十六回

雅 へい其哥の

室のうま 世の若き身ぞ高き

とく 老の角の老いあまこの筆をける

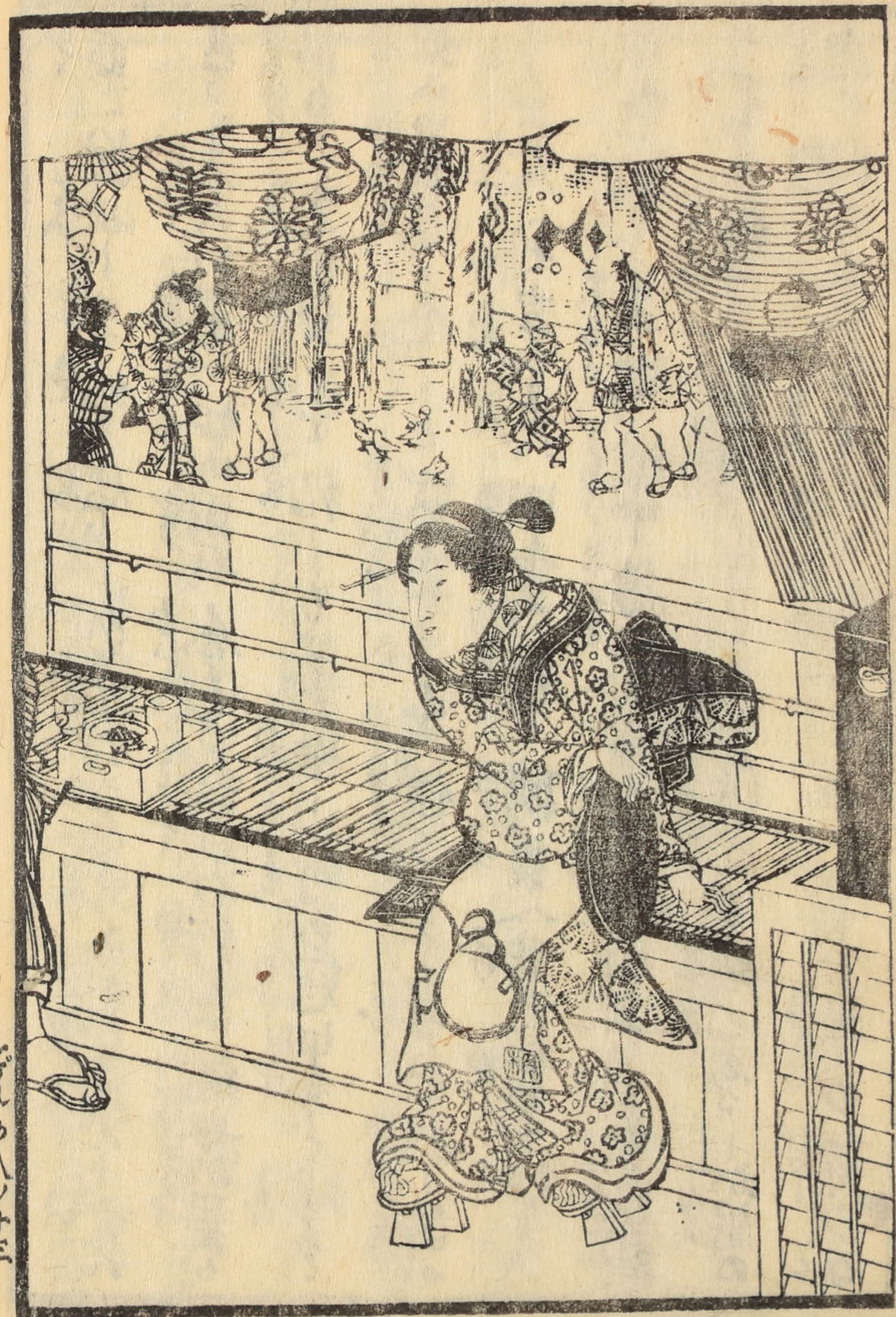
とよ哥の 一射で多く人がおれで居るまが 何れも名を
いふまはま いや名保あるあまが 達者の世の中は好む
あまの へいお栄さんか 始でけ亭へ十三回であうと時か
あまの へいお栄さんか 始でけ亭へ十三回であうと時か
あまの へいお栄さんか 始でけ亭へ十三回であうと時か

何と云ふ跡あるのまへモツは三丁目もあきまんは遠く解ん
りや多々王吉といふがおれも人品の能く發明の奥を三
れども十の十とてらうが實に實に上達して當時流
妓といふが實におれまん着せを三三々然と彼嬢は
身が根本より知れて居るがより程いかに愛まん顔の通
どが彼女に實にその面も町の土人形をこころに肉を
娘で才一親孝のの評判娘サ主癖捨るであつた
のを乳香の時より其門で育つたのが實に其の傍に
の

の夕拾ふゆも如彼が在る奇妙と雖もや然う成程
おれ面も町の久く居る妻一りふが實に親父
者でア可憐なう捨るう赤子の弟もさぞ可愛ら
る顔で在るふのよ能く思ひ限つて主癖を邪見が
めど情に親ごう三イヤ主癖を親へ主癖を苦うの
賤し者でもおれと主癖を捨る節の産めも情に主
裁で奇麗な位まで守袋が付て有る町の者が守
袋を明に見るうれども遠くの神をぬの心守れが入る

五十清氏の娘とあると有るヨシと云ふは後で拾ふと
いふ事親の在家がむさるる及座する一町内で世話をし
てお人形をこしらへる内身えんが産後思が死んで乳を食ふ
間より相度宜らうと相法で其門へかき継母が何れも
貧乏人より拾ふ人休むる和順者で主見を大なるは
何のこゝろ根あるひとくひの思妻がひきかゝるが今でも
捨てるの節の一ツ身巾の産業が万一実親は再會の
證拠ありと云ふといふ事第七十七年以來大切なは
あ

あつていふと云ふは後で拾ふと
いふ事親の在家がむさるる及座する一町内で世話をし
てお人形をこしらへる内身えんが産後思が死んで乳を食ふ
間より相度宜らうと相法で其門へかき継母が何れも
貧乏人より拾ふ人休むる和順者で主見を大なるは
何のこゝろ根あるひとくひの思妻がひきかゝるが今でも
捨てるの節の一ツ身巾の産業が万一実親は再會の
證拠ありと云ふといふ事第七十七年以來大切なは
あ



金銀より鳥がさき客より蜘蛛のつらさ
来る少く猶如此と言ひしを人々者か電の速に
護るを自ら時節をたぐ成るも預めず
あそ終ふんや神と人の懽のそ大願成るの時
べし。備もお客の負くも十七年の月日をこゝ再産
逢ふきよも人の便うとわ会しとわあれ
家子の安否お父思ひつづける今日ふまゝに
常々わ合人達の情をよゝふ神侍の

此方便あつるんと目順に利益を運ぶと
世に流るる観音大士を伏拝し今度おせし王吉の
情のいよくお涙のそ近き中のお名を合ひる力頼
とる。客の心をさるる先客を座の面を町
土人形屋を尋ね六のき松子と雪乳一なる遠き
糸補とや人直ふいふと再会するとの中お彼と
暖むるも思ふ客の心もお茶をたぐまゝ
茶の亭へ休居る酒客の客

二三人のききも、職人らしき仕事と見えたるがき中ふ
 女自勝せたる人と見え、男が中音あてまゐるの
 様子

[illegible]

おきりあしを國分と思ふびりーろくききふひん
みどもまた出来たる人かたよむけ身のまかり思
とて未ふるりさ七人の歌ふ人もせくと
わりの遠き國のそらりーろふ七人の歌ふ人もせくと
表はを僕も女の情

へきくもろくは鳥川まのよの雲けのうを
 おびの時きりのうみせもいつであづる胸むねの火ひの
 煙けむうろくぶんは関山
 きていりあづるあけのぼる香かうのうらまふひんて

[illegible]

いづれおきくものうーそとともたなるものう
ろのちまひくせむものさの^つたのうーみ
るふへえへ〜せむせむといふらんを見ても
^{あつち}
落ぬいのちのたまのみでうらやまし

世に於て

今月
 早仕
 其下
 其下
 其下

侍、亡人との門と号せどもありしナト
 看てお茶の物り、いへず申さるゝ所なりとて此世の
 侍ハテ久しう逢ぬがこそとて居りて目如度ナト言罷せ
 ましト腰を屈め書をさし出す侍客は、いふなりき
 茶單等の隙にひき書を以て持出、いふ入
 り候衣机より書取上り、あめのを又元の通の
 とふろく主行へ供人連うる氣流の侍並体とくふ

只
言
ま
物
ま
ゆ
の
人
月

